

県北総合開発地域

土地分類基本調査

生月・志々伎

5 万 分 の 1

国 土 調 査

長 崎 県

1 9 7 7

序 文

国土は国民のための限られた資源であり、その有効利用を図ることが、今後ますます要求されております。本県においてもその恵まれた環境を保全しつつ、地域の特性を生じた土地利用を基本理念として各種の施策を進めているところであります。

本調査はこのような諸施策を進めるに必要な調査のうち最も基礎的「地形」「表層地質」「土壌」を主体とする土地条件を科学的総合的に調査することを目的として、国土調査法に基づく都道府県土地分類基本調査を実施しているものであります。

本県の実施状況は、昭和48年度「肥前小浜」「長崎」「大村」昭和49年度「佐世保」「佐世保南部」「平戸」「早岐（長崎県佐賀県協同）」「唐津（佐賀県長崎県協同）」、50年度「神浦」「野母崎」、51年度「島原・荒尾」「口之津・三角」を実施しており、本年度は「生月・志々伎」の地域の調査を実施しその成果をとりまとめました。

52年度までに県の本土部を完了し53年度以降、離島地域の調査を実施する計画であります。

この調査の成果が広く関係各位に御活用いただければ幸いで御致します。この調査の実施にあたり御指導、御助言を賜わった国土庁土地局国土調査課をはじめ、調査に直接たずさわっていただきました方々、及び資料収集等積極的に御協力をいただいた市町村並びに関係機関の方々に対し心から謝意を表する次第であります。

昭和53年11月

長崎県理事（土地対策担当）

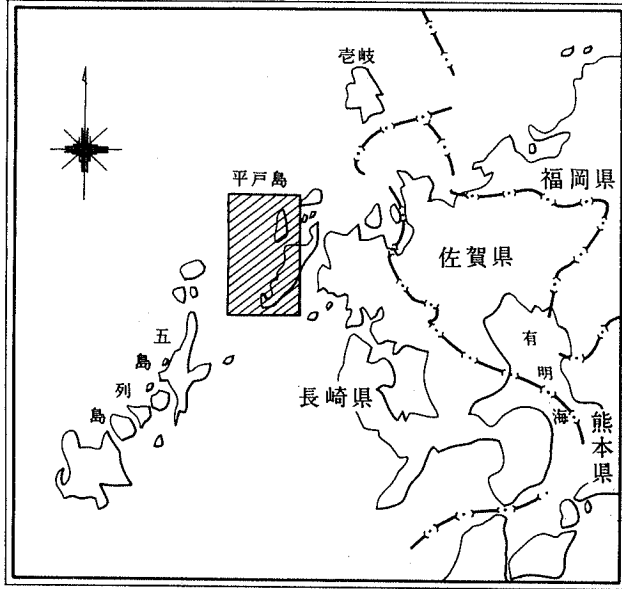
中 尾 光 喜

まえがき

1. 本調査は、都道府県土地分類基本調査作業規程に基づき、長崎県土地対策室・農林部（総合農林試験場）・長崎大学教育学部の諸機関により実施したもので、調査の事業主体は長崎県である。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図および土地分類基本調査簿である。
3. 調査基図は、測量法第27条第2項の規定により建設大臣が刊行した5万分の1地形図を使用した。
4. 調査の実施・成果作成の関係機関及び関係担当者は次のとおりである。

指 導	国土庁土地局国土調査課				
総 括	長崎県土地対策室	室 長	篠 原 義 男		
		副主幹	築 瀬 昭		
		技 師	島 田 進		
地 質 調 査	長崎大学教育学部	教 授	石 井 泰 義		
	開発関連調査（傾斜区分・水系・谷密度・土地利用現況）				
表層地質調査		教 授	鎌 田 泰 彦		
	開発関連調査（防 災）				
土 壌 調 査	長崎県総合農林試験場	部 長	小 野 末 太		
		専 門 研 究 員	松 尾 俊 彦		
協 力 機 関	長崎県関係各課及び関係地方機関 並びに関係市町村				

位置図



目 次

序 文

ま え が き

総 論

I 位置および行政区画	1
1. 位 置	
2. 行政区画	
II 地域の特性	2
1. 自然条件	
2. 社会経済条件	
III 主要産業の概要	7
IV 開発の現状と方向	8

各 論

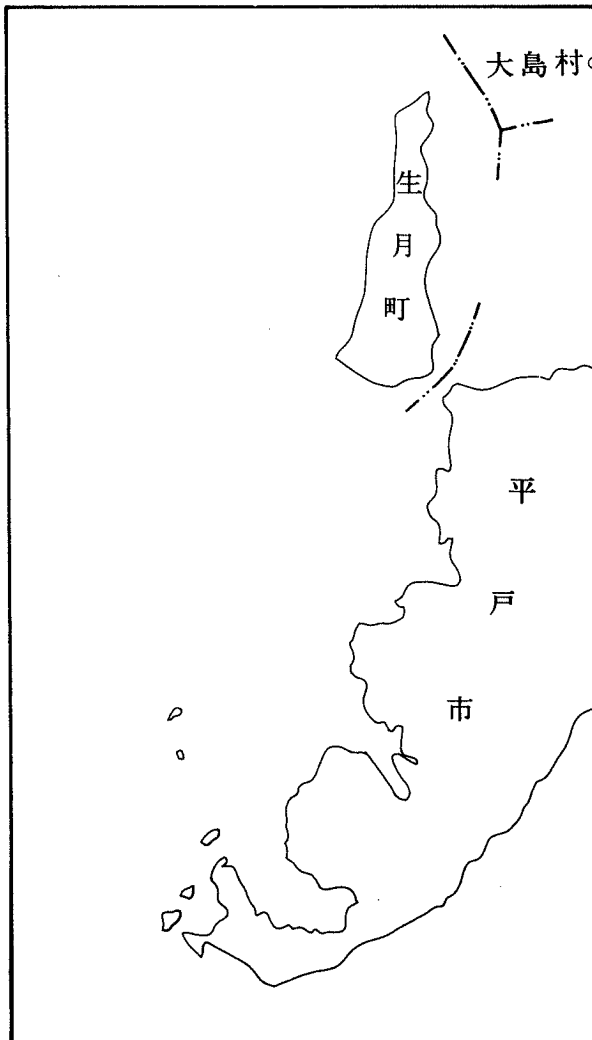
I 地形分類図	9
II 表層地質図	17
III 土 壌 図	23
IV 傾斜区分図	27
V 水系・谷密度図	29
VI 防 災 図	31
VII 土地利用現況図	33

總論

I 位置および行政区画

1. 位置：「生月・志々伎」図葉は長崎県の西北部に位置し、東経 $129^{\circ}31' \sim 129^{\circ}18'$ 北緯 $33^{\circ}29' \sim 33^{\circ}09'$ の範囲にあり、図葉内の陸地面積は 155.19km^2 である。
2. 行政区画：本図葉の行政区画は平戸市、生月町からなっている。

行政区画図



第1表 図葉内の市町村別面積

区分 市町村名	図葉内面積		市町村面積 B (Km ²)	A / B (%)
	実数 A (Km ²)	構成 (%)		
平戸市	125.94	88	171.21	73.6
生月町	16.52	12	16.52	100
計	142.46	100	187.73	75.9

資料：建設省国土地理院調べ（S. 52年），ただし図葉内面積については県土地対策室調べ

II 地域 の 特性

1. 自然的条件

ア. 気象条件

この地域は、九州型気候区のうち西海型気候区に属し、年平均気温18℃ 1月の平均気温6℃以上で冬は温かく夏は比較的涼しい地域で海洋性の気候に恵まれている。

第2表 月間平均最高気温 1℃

月 観測所	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
平戸	6.1	7.5	12.9	18.3	20.9	22.6	28.6	27.2	26.3	23.2	17.1	13.5	18.7

注 昭和52年1月～12月（資料）長崎県気象月報（長崎海洋気象台）

第3表 月間平均最低気温

1℃

観測所	月												平均
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
平戸	1.4	1.7	6.8	11.0	14.0	18.2	23.4	22.8	20.8	16.9	11.8	7.3	13.0

注 昭和52年1月～12月(資料)長崎県気象月報(長崎海洋気象台)

第4表 月間降水量

1mm

観測所	月												平均
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
平戸	34.5	39.5	158.0	317.0	233.5	353.0	77.5	233.5	74.5	41.0	158.5	66.5	1786.0

注 昭和52年1月～12月(資料)長崎県気象月報(長崎海洋気象台)

第5表 観測所の位置

観測所名	所在地	東経	北緯	海拔	摘要
平戸測候所	平戸市岩の上町	129°33'1	33°22'0	58	図葉外西側

イ. 土地利用の現況

関係市町の耕地率は19%で、県平均耕地率18%に比しやや上廻っているが、これはこの地域が比較的緩やかな傾斜が多く、丘の頂上周辺まで耕地が及んでいるためである。林業については森林率が54%で自然景観として風致的機能が高く、林産物の生産高は低い。このため人工造林の増大など生産道の整備を急いでいる。

第6表 土地利用の現況

市 町 村	総土地 面積(A)	耕地面積 (ha)				耕地率 (B)/(A)	森林面積 (C)	森林率 (C)/(A)
		田	畑	樹園地	計 (B)			
平 戸 市	Km ² 171.21	1,960	806	244	3,010	18	ha 9,663	56.
生 月 町	16.52	306	170	5	481	29	449	27
計	187.73		3,491			19	10,112	54
構 成 比	100%		19				54	

資料：長崎県統計年鑑（昭. 53年），長崎農林水産統計年報（昭51～52年）

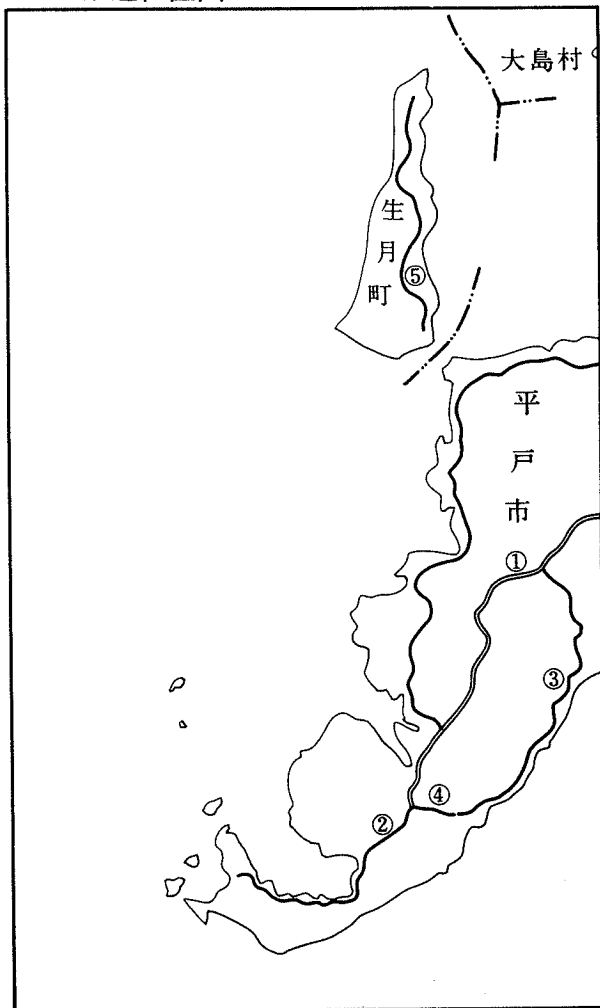
長崎県の林業統計（昭. 52年）

2. 社会経済条件

ア. 交 通

この地域のうち平戸市は51年度までは離島であったが、平戸大橋の完成により本土と連結された。開通後に国道383号線が設置され、これを主として主要地方道及び一般県道等は整備されつつある。地形的障害に悩まされ整備が遅れているのが現状である。生月町は海上交通によっている。

道路鉄道位置図



主 要 交 通 網

番号	区 分	路 線 名	起 点	終 点
1	国 道	383号線	平戸市津吉町	伊万里市（松浦市今福町）
2	主要地方道	平戸田平線	平戸市宮ノ浦	田平町小手田免（国道204号交点）
3	一般県道	前津吉港紐差線	平戸市前津吉港	平戸市前津吉港紐差（国道383号交点）
4	“	前津吉港線	平戸市前津吉港	平戸市前津吉港古田（国道383号交点）
5	“	館浦御崎	生月町館浦	生月町御崎

イ. 人 口

関係市町村の人口は、昭和53年40,550人であり、人口密度は1Km²当り平均216人と県平均259人に比し低い。

人口推移をみると年々若干の減少を見ている。

第7表 関係市町村の人口推移

（単位 人）

年次 市町村名	40年	45年	50年	53.1.1	53/40 (%)	人口密度 53.1.1 (1Km ² 当り)
平戸市	36,602	32,865	30,728	30,554	83	178
生月町	11,145	10,495	10,008	9,996	90	605
計	47,747	43,360	40,736	40,550	85	216

資料：長崎県統計年鑑（昭.53年）

Ⅲ 主要産業の概要

図葉内関係市町村の人口は昭和50年18,090人で産業別就業人口構成をみると第一次産業50%第二次産業16%第三次産業37%となっており、農業就業者の占める割合が非常に高い。

第8表 産業別就業人口の構成

(単位 人)

産業別 市町村名	総数	第一次産業				第二次産業				第三次 産業
		計	農業	林業 狩猟業	漁業	計	鉱業	建設業	製造業	
平戸市	13,844	6,771	5,303	9	1,459	1,719	6	878	835	5,354
生月町	4,246	2,278	865	3	1,410	696	—	483	213	1,272
計	18,090	9,049	6,168	12	2,869	2,415	6	1,361	1,048	6,626
構成比	100	50	34	0.0	16	13	0.0	8	6	37
県全体に占める割合(%)	3	6				1				2

資料：国勢調査（昭. 50年）

第9表 主要産業の状況

産業別 市町村名	農 業			漁 業		製 造 業			商 業	
	農家数	うち 専業	農業組 生産額	経営 体数	総漁 獲量	事業所	従業者	製造品 出荷額等	商店数	年間 販売額
平戸市	3,374	396	4,251	1,057	10	129	919	2,978	619	14,714
生月町	544	22	502	250	223	35	271	292	174	2,552
計	3,918	418	4,754	1,307	233	164	1,190	3,270	793	17,269
県全体に	0.05				27					

資料：長崎県統計年鑑（昭. 53年），長崎農林水産統計年報（昭. 51～52年）

IV 開発の現状と方向

本地区は県北地域における、観光開発計画の中心地域となっており、特に平戸架橋開通後は各種開発が予想され、今後農漁村の近代化とともに観光資源の開発等総合的視野に立った開発が行われることにより本地域の振興はさらに期待出来る。

各 論

I 地形分類図

1. 地形の概要

本図は、五万分の一地形図「生月」図幅と「志々伎」図幅をつなぎ合せたもので、生月島全島と北側の一部分を除く平戸島の大半とを含んでいる。

辰ノ瀬戸を隔てて平戸島と対峙する生月島は、番岳（286m）を最高点とし、南北両側に向って緩やかに傾斜する溶岩台地の島で、東西両山麓には地すべりが多発し、土石流による山麓地が形成され、東岸では段丘に移行し、中央部には陥没による松本・境目の低地がある。現在も地すべりの多発地帯をなしている島である。

平戸島には東西両側に起伏量200m内外を示す中起伏火山地が対照的に東北—西南方向に配列し、その間に神首根河谷、安満河谷、中津良河谷、津吉河谷が発達し、火山地を大きく二つに大別している。即ち、西に永満岳・鷲ノ岳・白岳・屏風岳・志々伎山の火山地が配列し、それに対応するかのよう東に上床溶岩台地・水岳・慈眼岳・白岩岳・浜岳の火山地が配列している。さらに、安満岳・簀ノ岳・白岳の火山地の西側には、海岸段丘を伴う西岸丘陵地が付随している。安満岳西麓には、安満川谷底平野が発達し、低地上には丘陵群や段丘群が分布している。慈眼岳・白岩岳火山地の東麓には分離丘陵群が接続し、海岸線は直線状をなして海食崖に富む。

島の南部には、屏風岳・志々伎岳が西側に蟠居し、座の半径2km内外の屏風岳火山地は円形の火山海岸を示し、志々伎山火山地は海食によって火山体の南半分を失っている。西の屏風岳に対して、東に浜岳火山地が配置され、志々伎火山地は、船越地峡部の砂丘によって浜岳火山地と接続している。屏風岳火山地の西方海上には上阿値賀島・下阿値賀島、志々伎火山地の先端部に近くには頭ヶ島・沖ノ島・高島などの属島が分布している。

上に述べた地形の性状を細説するため、次の地形区を設定した。

I 山地・山麓地

- I a. 安満岳中起伏火山地
- I a' 同上山麓地
- I b. 垣ノ岳・城山中起伏火山地
- I c. 鷲ノ岳・水岳小起伏火山地
- I d. 白岳中起伏火山地
- I d' 同上山麓地
- I e. 慈眼岳・白岩岳中起伏火山地
- I e' 同上山麓地

- I f 屏風岳中・小起伏火山地
- I g 浜岳中・小起伏火山地
- I g' 同上山麓地
- I h 志々伎山中起伏火山地
- I h' 同上山麓地
- II . 丘陵地 (火山性)
 - II a 生月島属島丘陵地
 - II b 平戸島北部西岸丘陵地
 - II c 平戸島中部西岸丘陵地
 - II d 紐差丘陵地
 - II e 平戸島東岸丘陵地
 - II f 平戸島南部丘陵地
- III . 台地・段丘
 - III a 生月溶岩台地
 - III a'-1 同上山麓地
 - III a'-2 生月段丘
 - III b 山野溶岩台地
 - III c 上床溶岩台地
 - III c' 同上山麓地
 - III d 坊主畑溶岩台地
 - III e 大野溶岩台地
 - III f 平戸島北岸段丘
 - III g 全 上北部西岸段丘
 - III h 全 上中部西岸段丘
 - III i 全 上南部西岸段丘
 - III j 全 上東岸段丘
 - III k 紐差段丘
 - III l 神曾根段丘
 - III m 中津良・津吉段丘
- IV . 低 地
 - IV a 生月低地
 - IV b 紐差低地

- Nc 神曾根川谷底平野
- Nd 平戸島北部西岸低地
- Ne 全 上南部西岸低地
- Nf 全 上東岸低地
- Ng 中津良低地
- Nh 津吉低地
- Ni 志々伎湾沿岸低地

2. 地形細説

2-1 山地・山麓地 (I)

2-1-1 安満岳火山地 (Ia , Ia')

安満岳 (520m) は、平戸島の最高峰で、安満岳火山地 (Ia) は、350m内外の起伏量を有するが、山頂部は $8^{\circ} \sim 15^{\circ}$ の緩傾斜面を示し、鯛ノ鼻 (447m) は、その最南端に当る。山腹は $20^{\circ} \sim 30^{\circ}$ の急傾斜面をなし、山麓地 (Ia') に移行している。山麓地の北部は 30° 以上の急傾斜を示す断層崖をなして、辰ノ瀬戸に臨み、白石は、旧い地すべり地帯で、土石流による微高地に漁業集落がみられる。白石の南・春日地区も旧い地すべり地で、小さな盆地状地形を形成している。また、白石の東方海岸の主師には地すべりが発生している。山麓地の西部は標高約100mの鞍部を境として、北部丘陵地 (IIc) に接し、その境界線上に地すべりが発生している。山麓地の南部は、安満川の水源を涵養し架の原丘陵地に接する。東部は、神曾根川及び垣ノ岳、城山間河谷の水源地帯をなし、上床溶岩台地山麓地 (IIIb') との境界に大越がある。安満岳北部山腹には、火山地 (Ia) と山麓地 (Ia') の境界部に、標高250~280mの山野溶岩台地 (IIIc) が介在している。

2-1-2 垣ノ岳・城山中起伏山地 (Ib)

安満岳火山地 (Ia) の東北に接する起伏量300m内外を示す急傾斜の火山地で、峡谷状の河谷によって、城山 (288m) と垣ノ岳 (327m) の2つに分断されている。城山には、山頂部から北向きのU字谷が発達し、爆裂口起源の河谷と推定される。垣ノ岳は頂上部から西向きに、この火山体を真半分に分断する半月状の急崖が発達している。城山は断層によって垣ノ岳から分断されたものか、又は、断層線上に新たに噴出した火山体であろう。城山・垣ノ岳間の簀ノ坪川は峡谷をなし、河口にダム (貯水量40万トン) 建設が行われている。この火山地 (Ib) の北岸には、海食崖が発達するが、火山海岸の原型をとどめている。

2-1-3 鷲ノ岳・水岳小起伏火山地 (Ic)

平戸島中央部、木ヶ津川下流低地の東西西側に鷲ノ岳 (207m) ・水岳 (193m) が小

起伏量の火山地をなし、鷲ノ岳の南麓には小規模な地すべりによる土石流がみられ、水田化されている。

2-1-4 白岳中起伏火山地 (Id)

中津良河谷と猪渡河谷の間には、有僧都岳 (350m)・白岳 (334m)・小白岳 (300m) が、南北に連なる中起伏量を示す火山地があり、白岳及び小白岳の急崖下に地すべりによる土石流が傾斜 8°内外の緩傾斜地を形成している。

2-1-5 慈眼岳・白岩岳中起伏山地 (Ie)

白岳中起伏火山地 (Id) の東には、中津良河谷をへだてて、慈眼岳 (371m)・白岩岳 (272m) などの南北に連なる山稜が、中起伏量を示す慈眼岳・白岩岳中起伏山地 (Ie) を形成している。この山地の山頂部は、傾斜 8°~15°の平坦面を示し、慈眼岳とその東南にある独立の標高点 (264.3m) との間の平坦面は、郷清水 (山麓の集落清水を供給する水源をなす山地の意) とよばれ、白岩岳西方の独立標高点 (286m) 付近の平坦面は上床とよばれている。山腹は急傾斜を示し、緩傾斜の山麓地 (Ie') に移行するが、山麓地 (Ie') 北部では、火山地 (Ie) との間に鞍部を有し、また標高 254m の突起があり、草積から東西に走る地形的断層線が推定される。山麓地の西南部では、敷佐川によって分離された丘陵状を示すが、山稜線が北方の慈眼岳に連なっているので、火山山麓地 (Ie') に含めた。山麓地 (Ie') の東北部では、慈眼岳東麓及び郷清水北麓に地すべりによる土石流地帯がみられ、東南部の山麓地は比較的急傾斜面をなし、海岸部の丘陵地との境界線上には鞍部が配列している。また白岩岳東及び南の急崖下には地すべりによる土石流が指摘される。

2-1-6 屏風岳中・小起伏火山地 (If)

屏風岳中・小起伏山地は、屏風岳 (394.4m) を中心とする座の半径約 2km の円形の火山地で、大志々伎・石堂峠・大野を結ぶ線で、北部の火山海岸を示す中起伏山地と南部の丘陵性の小起伏火山地に分断されている。北部は大越 (240m) を境として、東に屏風岳、西に佐志岳 (347m)・礫岩 (287m) があり、屏風岳は、西斜面の標高 240m の地点に鞍部 (女鹿ノ峠) を有し、山体は北北西-西南東の直線状河谷によって二分されている。佐志岳は、東斜面・標高 100m~140m に大野溶岩台地 (III d) を有し、礫岩は、山頂部に火山角礫岩の急崖を有する峨々たる山容を呈する。南部は、津吉西側の標高 153m の山地と志々伎背後の標高 145m の山地に分かれ、いずれも丘陵性小起伏火山地である。前者は北東に開口した火口と同方向に流出した溶岩流の地形を残存する新期の小型火山地で、後者は丘陵化した小起伏量の火山地で、石堂峠 (106m) を境として、屏風岳中起伏火山地に接する。

2-1-7 浜岳中・小起伏火山地 (I g)

屏風岳中小起伏火山地 (I f) の東南に隣接する浜岳中小起伏火山地は、浜岳 (235m) 山地で、中起伏量を示し、その東北部は、標高120~180mの丘陵性火山地で小起伏量を示す。浜岳南麓には旧期の地すべりによる立石の緩傾斜地があり、現在二次的の地すべりが発生している。浜岳南麓は高さ80mに及ぶ海食崖が発達し、山麓地 (I g) は、小田付近にわずかに附随している。川内池を境に、浜岳に接する東北部の小起伏火山地は、その東南麓を高さ90mに及ぶ海食崖によって切断され、分水界は東海岸に偏在し、北西部は傾斜3~8の緩傾斜面を示している。

2-1-8 志々伎中起伏火山地 (I h)

志々伎湾南岸には、船越地峡部をへだてて志々伎中起伏火山地 (I h) が、屏風岳・浜岳と対峙している。志々伎山 (347m) の南麓には、高さ40~150mの海食崖が延長約4kmにわたって発達して、中起伏量を示す志々伎火山地の南麓には山麓地を欠き、志々伎湾に臨む北麓に火山山麓地 (I h') を伴い、中起伏火山地 (I h) との境界には遷急点が配列している。山麓地は溺れ谷の形状を示し、岬の先端には高さ50m内外の海食崖がみられる。

2-2 丘陵地 (II)

2-2-1 生月島属島丘陵地

生月島周辺の属島である鯨島^{けいじま}・大塔^{おおたか}および平瀬・中江ノ島 (平戸市に属する) を生月島属島丘陵地 (II a) とした。中江島は、標高34mで、北東海岸に海食崖を有するキリシタンの聖地として有名な丘陵地、平瀬・鯨島・大塔は平坦な岩礁地で絶好の釣場をなしている。

2-2-2 平戸島北部西岸丘陵地 (II b)

平戸島北部西岸丘陵地 (II b) は、安満岳 (I a) 西南麓の標高100m内外の鞍部で火山地と分離し、起伏量100~200mの丘陵地である。春日-高越-獅子-根獅子の海岸地帯をなし、小島・竹ノ子島もこれに含む。

2-2-3 平戸島中部西岸丘陵地 (II c)

平戸島中部西岸丘陵地 (II c) は、東西に走る飯良河谷、南北に走る猪渡^{いとや}谷河谷によって白岳中起伏火山地 (I d) から分離している丘陵地で、飯良地区では、地すべりが発生、根獅子斜面は古い土石流による緩傾斜面がみられる。猪渡谷河谷以西の丘陵地では、海岸部の南飯良・馬込・小島地区に地すべりが発生している。標高67mの立場島もII cに含まれる。II cの海岸には北向きの海岸に海食崖の発達が顕著である。

2-2-4 紐差丘陵地 (II d)

平戸島中央部の紐差丘陵地(Ⅱd)は、安満岳南麓の火山山麓地(Ⅰa')に接する朶の原丘陵地と上床溶岩台地の山麓地(Ⅲc')に接する迎紐差丘陵地に分けられる。前者は三軒屋から紐差にかけての安満川谷底平野(Ⅳb)の中に孤立した丘陵群をなし、起伏量は50m内外にすぎない。後者は安満川支谷や木場河谷によって上床山麓地との間に鞍部を有する丘陵地で、起伏量100~200mを示している。迎紐差には地すべりが発生している。

2-2-5 平戸島東岸丘陵地(Ⅱe)

平戸島東岸丘陵地(Ⅱe)は、慈眼岳・白岩岳中起伏山地東麓の山麓地(Ⅰe')に接する丘陵地である。火山地との間に明瞭な断層鞍部を有する断層突起群で、起伏量は100m以下を示している。大川原以北では、北北西-南南東に配列し、大川原では地すべりが発生している。大川原以南では、平戸島東岸に北東-西南方向に配列する標高50m内外の小さな孤丘群をなし、丘陵の東岸は、海食崖をなしている。また、断層鞍部には、これを連ねる道路を通じている。

2-2-6 平戸島南部丘陵地(Ⅱf)

平戸島南部丘陵地(Ⅱf)は、志々伎灣口を扼する宮ノ浦北方の丘陵地で、起伏量は100~130mを示し、宮ノ浦の鞍部で、志々伎火山地と接する。また、宮ノ浦南方の魚釣崎の所在する島は、干潮時わずかに岩礁によって本島とつながるが、起伏量60~80mの丘陵地で南岸には、高さ40mの海食崖が連続している。頭ヶ島・中ノ島・オイトク島・沖ノ島・高島・尾上島は、起伏量100m以下の丘陵地で、西岸に海食崖が卓越する。頭ヶ島の北方3~4kmの地点に浮ぶ下阿値賀島・上阿値賀島は、起伏量100~200mの丘陵地で、島の周辺には高さ50mに及ぶ海食崖が囲繞している。

2-3 台地・段丘(Ⅲ)

2-3-1 生月溶岩台地・山麓地・段丘(Ⅲa, Ⅲa'-1, Ⅲa'-2)

生月島は第三紀層上に噴出した玄武岩からなる台状火山地(Ⅲa)が高地を形成している。台地は、中央部で切断され、番岳(286m)以北の北部溶岩台地と山頭(257m)の南部溶岩台地に区分され、北部溶岩台地は北方に次第にその高度を減じ、北端は御崎の標高80~100mの低位溶岩台地に終わっている。南部溶岩台地は、南方に低夷し、低位溶岩台地は長瀬鼻~荒崎の急崖がその末端部をなしている。これらの台地面は、永年にわたって繰返された地すべりによって、その平坦面を縮小され、地すべり頻度の高かった中央部では、台地面を消失し、上述の南北台地に分けられている。北部台地は、東西両方向の地すべりのほかに北向き地すべりによって削られたため台地は分岐し、縮小され、一部番岳(112m)はビュート化されている。山頭以南の南部台地は三角形に南に広く台地の原面が保

存されている。台地周辺の急崖下にある山麓地（Ⅲa'-1）は、第三紀層上に地すべりの多発による土石流をのせた地帯で台地との境界付近の地すべり鞍部には湧水帯があり、溜池に利用されている。さらに東側の山麓地では、二次的地すべりの多発によって、その先端の山田・境目・大久保・御崎に緩傾斜の土石流が流れ、これが砂礫段丘（Ⅲa'-2）を形づくっている。台地の西縁には急崖の発達著しく、崖下に土石流を主とする山麓地を伴うが、砂礫段丘の発達はみられない。近年、活動した地すべり地は、東麓に多く、大久保・竹崎・里・境目・松本・佳路・有景田にみられる。西麓では、番岳西南麓の飛子があげられるにすぎない。

2-3-2 平戸島溶岩台地（Ⅲb, Ⅲc, Ⅲc', Ⅲd, Ⅲe）

平戸島では、安満岳の北斜面標高250~300m間に傾斜5°内外の平坦地からなる山野中位溶岩台地（Ⅲb）があり、台地上には、生月島・中江ノ島を眼下に望むカトリック集落・山野がある。安満岳の東には、神曾根川・安満川の上流に当る大越を隔てて、標高350~405mを示す上床^{うわど}高位溶岩台地（Ⅲc）があり、その山麓地（Ⅲc'）の木場には、地すべりによる土石流の緩傾斜地がある。

平戸島の東岸・坊主畑付近は、標高100~164mの低位溶岩台地（Ⅲd）で、周辺は100m以下に低夷し、海岸段丘に移行している。

平戸島南部の佐志岳東斜面には、標高100~150mの間に傾斜3°内外の平坦地があり、大野低位溶岩台地（Ⅲe）をなす。

2-3-3 平戸島岩石段丘・砂礫段丘（Ⅲf, Ⅲg, Ⅲh, Ⅲi, Ⅲj, Ⅲk, Ⅲl）

平戸島の北岸の主師・小主師・白石には、山崩れ乃至地すべりによる土石流の堆積でできた小規模な砂礫段丘（Ⅲf）が指摘され、平戸島北部西岸段丘（Ⅲg）としては、春日・獅子・根獅子に岩石段丘。高越には土石流からなる砂礫段丘がある。中部西岸段丘（Ⅲg）としては、飯良湾口の両岸及び堤北岸に標高50m内外の海岸段丘があり、後者には鬼の岩屋のSca Caveが発達している。南部西岸段丘（Ⅲh）としては、屏風岳火山地周辺の大佐志及び早福に小規模な海岸段丘が指摘される。また、志々伎湾沿岸には、北岸の潮見崎・南岸の小田・向月・野子に点々と海岸段丘が散在している。属島では、高島の東岸に、標高20mの段丘が残存している。

平戸島東岸には段丘が乏しく、坊主畑低位溶岩台地（Ⅲd）の末端が海岸段丘（Ⅲj）に移行し、大川原川上流の赤松では土石流が砂礫段丘を構成している。東南岸では浜岳南麓の立石に地すべりによる土石流の平坦地が、砂礫段丘として指摘されるにすぎない。

平戸島中央部の安満川・木ヶ津川沿岸には、朶ヶ原・馬込などの砂礫段丘が紐差段丘（Ⅲk）を形成し、大越を隔てた神曾根川上流にも河岸段丘（Ⅲl）がみられる。中津良河

谷・津吉～志々伎を結ぶ河谷の両岸には、比高10～20mの河岸段丘(Ⅲm)が散在している。

2-4 低地(Ⅳ)

2-4-1 生月島低地(Ⅳa)

生月島の松本低地は、明治以後数回にわたる地すべりによって陥没してできた低地で、周囲に滑落崖を伴っている。背後の滑落崖の高さは50m余で、陥没量を示している。松本低地は明治以後できた新しい陥没による海岸低地である。境目低地は時代未詳であるが、同様の形成過程で形成された海岸低地である。番岳西麓には地すべり鞍部が小規模な低地を形成し、島の北端部には、溶岩台地を東西方向にきる溝状低地がある。

2-4-2 平戸島北部低地(Ⅳb, Ⅳc, Ⅳd)

北部低地は北西海岸に流入する小河谷の谷底平野(Ⅳd)のほかは、安満川・木ヶ津川及び河口の干拓地からなる紐差低地(Ⅳb)が最も大きな低地で、神曾根川谷底平野(Ⅳc)はこの図の東北部にその一部をのぞかせているにすぎない。

2-4-3 平戸島南部低地(Ⅳe, Ⅳf, Ⅳg, Ⅳh, Ⅳi)

飯良・堤の低地(Ⅳe)は、西岸に流入する小河谷からなる低地で、堤の低地の大半は古い干拓地で、かつては池の内と呼ばれた瀉(Lagoon)であった。東岸低地(Ⅳf)は、大河原から前津吉にかけて配列する小丘陵間の低地で、いずれも小さく、船木低地は海岸に砂丘を有する後背低湿地(Back Marsh)で、前津吉も、坊山鼻の丘陵を陸繋島化したトンボ口の内側にあるBack Marshの海岸低地である。中津良低地(Ⅳg)は、中津良川・敷佐川・猪渡谷川の狭長な谷底平野と河口の古い干拓地からなる低地で、津吉低地(Ⅳh)は、古田川中～下流部の大半は古い干拓地からなる海岸低地で、上流部にわずかな谷底平野がある。また、屏風岳北麓の大佐志・早福の谷底平野も狭小なものとして津吉低地(Ⅳh)に含めた。志々伎 鷺沿岸低地(Ⅳi)としては、鷺奥に大志々伎・小田の海岸低地および、志々伎中起伏火山地を陸繋する船越地峡部に砂丘を主とす海岸低地があり、南岸に野子・福良のきわめて小規模な低地が指摘される。

(長崎大学教育学部 石井 泰義)

II 表層地質図

「生月」・「志々伎」図幅内には、長崎県の本土地域の北西部に隣接する生月島と、平戸島の大部分を包含している。生月島の大部分は玄武岩によって構成されるが、基盤をなす新第三紀層が海岸地帯に分布し、両者の境界部においては、古くから典型的な第三紀層地すべりが発生している。平戸島には安山岩質の火山岩類が広く分布し、旧期の志々伎火山岩類と、新期の早福凝灰角礫岩および安満岳安山岩などと大別される。また独立した火山地質により特徴づけられる地形として、上床の玄武岩溶岩台地や、垣ノ岳の石英安山岩の溶岩円頂丘がある。

本図幅内の地質に関しては、公表された資料はきわめて少なく、比較的新しいものとして地質調査所の20万分の1地質図幅「長崎」・「唐津」の中にその概略が示されているのにすぎない。従って、本地質図は、主として本年度の国土調査による現地踏査と、既存の長崎県耕地課の地すべり調査報告に基づいて編図したものである。本調査に際し、岩相の識別や火山岩類の形成順序などについて、いくらかの未解決の問題点を残しているが、これらは今後の調査と研究によって逐次修正を施してゆかなければならない。

1. 未固結堆積物

1-1 砂（海浜砂） s

平戸島の西岸は海岸線の出入りがはげしく、灣の奥には砂浜の発達する所が多い。根獅子や飯良には代表的な砂浜が知られ、とくに干潮時には貝殻混りの白い砂が遠浅の広い浜一面に広がる。

1-2 礫（海浜礫） g

平戸島南部の南東側では海食崖がよく発達するが、その前面に礫浜をともなう場合が多い。礫種の殆んどは付近に分布する安山岩であり、よく円磨されている。また、礫の中には白色のめのうが混在することが多い。

1-3 礫・砂・泥（沖積低地堆積層） a

平戸島中部の紐差、南部の中津良・津吉には、安山岩類を侵食した細長い谷が発達し、礫・砂・泥よりなる沖積層により埋積されている。

2. 半固結堆積物

2-1 礫・粘土（段丘堆積層） t

紐差町神ノ池の下流には低位段丘が発達する。これには安山岩の礫よりなる段丘礫層をもち、礫の間の基質は著しく粘土化されている。この段丘は、旧安満川の化石谷に形成されたものであろう。

地層および岩石一覽（生月・志々伎図幅）

地質時代		地質系統	表層地質分類			
新 生 代	第 四 紀	完新世 (沖積世)	埋立地	c	土石	未固結 堆積物
			海浜砂	s	砂	
			海浜礫	g	礫(砂利)	
			沖積低地堆積層	a	礫・砂・泥	
	紀 (洪積世)	更新世	段丘堆積層	t	礫・粘土	半固結 堆積物
			垣ノ岳石英安山岩	Da	石英安山岩	火 山 性 岩 石
			上床玄武岩	Ba	玄武岩(註)	
			安満岳安山岩	An1	輝石安山岩	
			早福凝灰角礫岩	Tb	安山岩質凝灰角礫岩	
	小主師溶結凝灰岩	Wt	溶結凝灰岩			
	新 第 三 紀	鮮 新 世 中 新 世	春日層灰岩	Tf	層灰岩・円礫岩	火 山 性 岩 石
			白石軽石凝灰岩	Pt	軽石凝灰岩	
			志々伎火山岩類	Pr	変朽安山岩(プロピライト)	
				An2	輝石安山岩・火山角礫岩	
				Do	粗粒玄武岩	
(岩脈)			Dy	岩脈岩類		
平戸層			Hd	砂岩・泥岩・凝灰岩	固結	
田平層			Nt	砂岩・泥岩	堆積物	

(註) 生月島に分布する生月玄武岩類は、これよりも古い新第三紀の松浦玄武岩に対比されるものであろう。

3. 固結堆積物

3-1 砂岩・泥岩・凝灰岩（平戸層）Hd

「生月」図幅内の平戸島北部、主師および坊方にわずかに分布する地層である。岩質は凝灰質の砂岩や泥岩であり、凝灰岩と互層をなす場合が多い。主師では薄い炭質頁岩を挟在する所がある。本層は垂直的にも側方にも岩相の変化が著しく、一般化した層序をたてることはきわめて困難である。坊方の東に隣接する中野大久保には、薄層理のよく発達した凝灰質泥岩が分布し、植物化石を多産する。

3-2 砂岩・泥岩（田平層）Nt

田平層は平戸大橋の両側の海岸にそって分布する地層で、野島層群の最上部層として取扱う。平戸側では白浜より南竜崎にかけての海崖に露出する砂岩の厚層で代表されるが、本図幅内では生月島に分布する第三紀層を本層に対比した。

生月島の田平層の岩質は、主として細～中粒砂岩と泥岩の互層であり、泥岩には団塊（ノジュール）をもつことが多い。また部分的に泥岩や砂質泥岩中に炭片を含む。里塚目のボーリングコア中よりコケ虫が付着したカキの貝殻化石を見出しているため、生月島の本層は汽水～浅海成の堆積層と考えられる。露頭は松本地すべりの滑落崖や、宍部浦南部の海崖などで見られるにすぎないが、地すべり崩積土に覆われて海拔およそ100m以下に伏在していることが、数多くのボーリング調査で確認されている。

4. 火山性岩石

4-1 石英安山岩（垣ノ岳石英安山岩）Da

溶岩円頂丘をなす垣ノ岳と城山をつくる灰色の安山岩であり、暗灰色の石英閃緑岩質の捕獲岩（ゼノリス）を含むことが多い。斑晶として、石英・斜長石・角閃石・黒雲母・シソ輝石をもつ。

4-2 玄武岩（生月・上床玄武岩）Ba

生月島の玄武岩は、九州北西部に広く分布する松浦玄武岩の一部をなすもので、新第三紀層を不整合を覆う数枚の溶岩流として重なり合っている。各溶岩流の境界部には、集塊岩的な多孔質溶岩や、赤茶色の硬質粘土が挟在する。岩型は数種あるが、一般にカンラン石玄武岩よりなる。南部の山田地区の最下部の溶岩は粗粒玄武岩質である。御崎西海岸の海食崖にあらわれた柱状節理は壮観である。生月島東方の中江ノ島と平瀬も玄武岩の島で、柱状節理の発達する部分もある。

平戸島上床は2～3枚の玄武岩の溶岩流よりなる溶岩台地で、その厚さは150～200mに達する。岩型は主にカンラン石玄武岩であるが、最下部の溶岩は粗粒玄武岩質である。前津吉町坊山鼻にも玄武岩の小岩体がある。

4-3 輝石安山岩（安満岳安山岩） An1

安満岳をはじめ、平戸島南部の有僧都岳・慈眼岳・屏風岳の山頂部は、灰色の複輝石安山岩によって構成されている。斑晶はきわめて細かく、板状節理が発達する場合が多い。本地域においては新期の輝石安山岩に属し、九州中・北部に広く分布する豊肥溶岩（筑紫溶岩）に対比される。

4-4 安山岩質凝灰角礫岩（早福凝灰角礫岩） Tb

前記の輝石安山岩の下位に横たわる安山岩の角礫をもつ火山砕屑岩であり、山腹斜面に露出する所ではいわゆる「集塊岩地形」をつくる。志々伎北方の礫岩はその好例である。

4-5 溶結凝灰岩（小主師溶結凝灰岩） Wt

安満岳北麓の主師、小主師、春日一帯の海拔150～200 m付近には、溶結凝灰岩が分布する。黒褐色を呈し、黒曜石が押しつぶされた溶結凝灰岩に特有な構造が露頭においても認められる。斑晶状の鉱物として、多量の斜長石とシソ輝石・普通輝石・角閃石・鉄鉱物を含んでいる。基質のガラスは著しい流動構造を示す。

志々伎内内の潮見崎や、宮ノ浦のオイトク島、沖ノ島にも同様な溶結凝灰岩が分布する。いずれの場所においても、下位に安山岩や流紋岩を含む火山角礫岩をともなっている。

4-6 層灰岩・円礫岩（春日層灰岩） Tf

安満岳北西部の春日付近によく成層した凝灰岩や凝灰角礫岩層が分布する。この層灰岩にはチャート・石英・砂岩などの硬質岩のよく円磨された礫よりなる円礫岩を挟在する。また固結度の低い中～粗粒砂岩をともなう。前津吉より大川原に至る海岸にそって成層した火山礫凝灰岩が分布し、部分的に軟弱な細粒凝灰岩や凝灰質砂岩を挟在する。これらは岩相上、春日層灰岩に対比される。

4-7 軽石凝灰岩（白石軽石凝灰岩） Pt

安満岳北西麓にあたる白石の海岸や、白石から小主師に至る間には、白～灰色の軽石流堆積物が分布する。岩石は塊状無層理の軽石凝灰岩であり、大型の軽石（最大径40cm）や黒曜石を含む。この下位には軽石質凝灰角礫岩をともなっている。

4-8 変朽安山岩（プロピライト） Pr

紐差町西部より根獅子町にかけて変朽安山岩が分布するが、志々伎火山岩類の主体をなす輝石安山岩・火山角礫岩がプロピライト化されたものである。鏡下では、有色鉱物の緑泥石化、石基の粒状化、炭酸塩鉱物による置換などが認められる。変質が著しく、脱色したり、珪化した部分は変質帯として図示した。

4-9 輝石安山岩・火山角礫岩 An2

志々伎火山岩類の主部をなすもので、平戸島における旧期の輝石安山岩類に属する。一

般に溶岩状を呈するが、火山角礫岩を挟在する部分も多い。また自破砕溶岩も認められる。全体的に方解石やめのうなどの晶洞鉱物をもつことが多い。数種の岩型が識別できるが、主な種類として次のものがある。

- 1) 斑晶には大型の斜長石を豊富にもち、鉄苦土鉱物に乏しい。石基は粗粒の斜長石と普通輝石よりなる(津吉型)。
- 2) 斑晶には、斜長石・シソ輝石・普通輝石を適当に含み、石基はきわめて微細な斜長石が流理構造を示す(紐差型)。
- 3) オフィテック組織をもつ玄武岩質安山岩、ないしは粗粒玄武岩。

津吉型の輝石安山岩は最も広く分布し、紐差型は紐差町東部や志々伎南東部に認められる。粗粒玄武岩は、志々伎南東部の海岸地帯や猪渡谷北部の萩坂池付近に分布するが、その限界が不明なので一括した。このような玄武岩質岩石は志々伎火山岩類の下部の溶岩部を示すものと考えられる。また前津吉と大川原間に分布する春日層灰岩相当層の上位に重なる斑晶のきわめて少ない緻密な輝石安山岩は、本岩体の最上部に当るものと考えられる。

4-10 粗粒玄武岩 Do

平戸島南部の西方海上に浮ぶ上阿値賀・下阿値賀島は、いずれも暗灰～黒色の密な岩石よりなり、岩石名は「シソ輝石普通輝石微斑レイ岩質粗粒玄武岩」とされている(松本, 1971)。下阿値賀島では、本岩を貫ぬく石英安山岩の岩脈があり、約5mの脈幅をもつ。

4-11 岩脈岩類 Dy

平戸島南岸の海食崖には、志々伎火山岩類を貫ぬく無数の岩脈が露出する。地質図中には航空写真において認められる程度のものを記入した。岩質は輝石安山岩から粗粒玄武岩に及ぶ。北岸にも白石軽石凝灰岩を貫ぬく玄武岩質の岩脈が認められている。

5. 応用地質

5-1 地質災害

本図幅内の地すべり指定区域は、生月島に6カ所、平戸島に13カ所あって、それぞれ防止対策の調査と工事が行われている。

生月島の地すべりは、東海岸にそった地域の第三紀層(田平層)の泥岩が吸水や圧砕によって地すべり粘土を形成し、その上に重なる砂岩や玄武岩起原の崩積土が滑動する際に発生している。第三紀層中で地すべり粘土が形成され易い層準はほぼ一定した所において、しかも地層の傾斜が東～南東に5～10°傾むくため、流れ盤的な滑動を起している。

平戸島においては、主師は平戸層と春日層灰岩の境界部において地すべり現象を起している。飯良・南飯良・前津吉などでは、志々伎火山岩類中に挟在する凝灰岩が風化作用により粘土化されて、地すべり滑動が行われている。

5-2 採石

前津吉では無斑晶質の輝石安山岩よりバラス(粗骨材)を、また紐差ではプロピライトを石垣用間知石として採石している。また根獅子東部では脱色化した変質安山岩をタイル原料のカオリンとして採掘している。

主要参考文献

- 長 充功(1977):平戸島南部の地質学的研究 長崎大学教育学部卒業研究報告(手記)
- 藤永建設(1969):生月島の地すべり 1-7.
- 東浜秀昭・辻 和毅・温湯勝相・安達秀男・藤野俊雄・今増俊明(1972):長崎県平戸島南部の火山地質について 日本地質学会西日本支部会報 56, 1-2.
- 今井 功・松井和典・水野篤行・長浜春夫(1965):20万分の1地質図「長崎」地質調査所
- 鎌田泰彦(1966):平戸市南飯良地区地すべり調査報告 長崎県農林部耕地課 1-11..
- “ (1966):生月町松本第二地区地すべり調査報告 同上 1-13.
- “ (1966):平戸市主師地区地すべり調査報告 同上 1-11.
- “ (1969):生月町松本地区地すべり調査報告 同上 1-4.
- “ (1969):生月町山田地区地すべり調査報告 同上 1-10.
- “ (1970):生月町里塚目地区地すべり調査報告 同上 1-10.
- “ (1972):生月町森岳崎地区地すべり調査報告 同上 1-8
- “ (1973):平戸層に関する2.3の新事実と問題点 長崎県地学会誌 19, 8-14.
- “ (1973):平戸市北飯良地区地すべり調査報告 長崎県農林部耕地課 1-10.
- “ (1974):生月町里塚目第二地区地すべり調査報告 同上 1-10.
- 松本雅夫(1971):平戸市阿値賀島の地質 長崎県地学会誌 16, 1-3.
- 松村昭彦(1978):長崎県平戸島北部の地質学的研究 長崎大学教育学部卒業研究報告(手記)
- 大築洋之助(1917):20万分の1地質図「平戸」および同説明書 地質調査所 1-129.
- 沢田秀穂・沢村孝之助・今井 功・長浜春夫(1965):5万分の1地質図幅「平戸」および同説明書 地質調査所 1-33.
- 鈴木達夫・今井 功・松井和典(1959):20万分の1地質図「唐津」地質調査所.
- (長崎大学教育学部 鎌田泰彦)

Ⅲ 土 壤 図

1. 山地の土壤

1-1 土壤の概要

図幅中には生月島および平戸島西南半が含まれる。

生月島は南北に長く、これを縦断する250 m級の背陵山地を境として東部は農地・市街地として拓け、西部に山地・原野が残っている。

平戸島は非常に複雑な地形を呈するが、全島に点在する200~400 mの小山地が目につく。これを縫って解析・運積による低地が形成され、農地・居住地として利用される。なお、中北部安満岳一帯が島内唯一の中起伏山塊となっている。

母材は平戸層群を被覆する火山岩。即ち、生月では玄武岩であり、平戸ではモザイク的に分布する玄武岩・輝石安山岩・凝灰角礫岩・変朽安山岩等が大勢を占めている。

土壤は母材に由来する暗赤色土壤が印象的で、点々と全域に認められる。典型的な褐色森林土は、低起伏のためもあるて現われない。土色は黄褐-明褐-橙までの変異も漸変、かつ連続的に地域性も認められず、分別が困難である。更に物理・化学的性質も極めて類似しており、実用上系統による差を見出し難い。このため、本図幅では黄・赤色系の峻別を行わず、全て黄褐色系土壤として記載した。

1-2 細 説

1-2-1 乾性褐色森林土(黄褐色)

図幅中での最大面積を占め、分布は全域に及ぶ。母材は多岐にわたるが主として変朽安山岩、輝石安山岩等の火山岩より成る。海からの距離が短かく、地形をみても小起伏の上とか尾根、上昇緩斜面等に位置する場合が多いので、風衝の有無が生産力を大きく左右している。部分的にヒノキ・スギの造林に利用されているが風から保護されていればヒノキ林の成立が期待できるところもある。しかし面積は僅かで多くはいわゆる「マツ地」といえる。

1-2-2 褐色森林土(黄褐色)

前項の土壤統群に伴ない、沢沿い、下降斜面等に分布する。土壤は概して深く、理・化学性とも一般には良好である。

しかし海に近く、起伏も小さいため長期間の林業生産には危険が大きいところも数多い。林況はシイ・カシ、或はマテバシイを主体とした萌芽林になっているところが多いが、安満岳周辺は広くスギ・ヒノキの造林に利用されている。現在の生育状況は県の水準からみて並程度である。

1-2-3 暗赤色土壌（乾性）

これまで赤みが強い土壌で玄武岩を母材とし、比較的塩基量に富むものは暗赤色土とし、更に乾湿によって亜群を設けてきた。本図幅ではこれに、輝石安山岩等 密度の高い、玄武岩に類似した母材のものを加えた。赤色土とするには塩基量に富みpH値もそう低くならない。又、玄武岩母材の暗赤色土と外見上はもとより物理的性質も大差がない等の理由による。腐植の浸透が悪く、A層はあまり発達しない。また風の影響を強く受けたところが非常に多い。植生現況は平戸では大部分がスダジイを主とした照葉樹の二次林又は草地になっているが、生月ではマツ林が主である。最近各所でヒノキの植栽を試みているが、総じて危険の方が大きいと思われる。

1-2-4 暗赤色土壌

前項土壌の斜面下部に分布する。A層は比較的厚くなっており、又風衝からはずっと保護されている。そのため、生産力はかなり高いものが多い。部分的には照葉樹林も残存するが殆んどスギ・ヒノキ造林地として利用されている。

1-3 利 用

この地域における本来の植生はスダジイ主体の照葉樹林だが、現在はシイ・アラカシ萌芽林、クロマツ群落、ススキ・チガヤの草原、造林地、農地等となっている。又、部分的に県北地域に多いマテバシイ萌芽林もみられる。問題はクロマツ林におけるマツノザイセンチュウ病で懸命の防除にかかわらず、平戸ではすでに全滅、生月でも南部から罹病し、全島にまんえんした。潮風が強いこれら島嶋で防風・防潮・水源涵養機能を果してきたマツ林を急激に失うことは極めて深刻な事態と云える。守り残すには予防薬撒と並んで、罹病木の徹底駆除を行なう他はない。それにはたいへんな労力を必要とし、実施にあたっての困難も多いのでマツに代る後継樹林の育成も急がれる。

生産性の高い林地はある程度みられるが、全般に地形が複雑で、潮風が非常に強い。このため、寒風害、干害等にかかり易い地域や、大規模な一斉皆伐、一斉造林が危険な場所が広範にみられる。尾根筋に残す保護樹林帯の意義が大きい地域と云えよう。

（長崎県総合農林試験場 松尾俊彦）

2. 丘陵台地低地の土壌

2-1 土壌の概要

本地域は志々伎山、屏風山、白岩岳、有僧都岳、慈眼岳、鴛ノ岳、鯛ノ鼻等の山地が多く、これらの山地から源を発する敷佐川、中津良川、安満川等の小河川の流域に僅かに低

地が分布している。

丘陵台地の土壌は黄色土壌（湿性）が多く、黄色土壌、赤色土壌がこれに次ぎ、暗赤色土壌（湿性）は先月町に僅かに分布している。

本地域は本県の北西部に位置し、水稻、みかんが栽培され、又ばれいしょ、花卉花木の産地化が進められており、養蚕、肉用牛、養豚の生産も多い。

2-2 土壌の細説

2-2-5 赤色土壌

下層土の土色が5 YR 4/4 より赤い土壌である。玄武岩、安山岩の風化物を母材とする土壌で表土の土性はLiC、下層土はLiC~HCである。生月の一部平戸島に点在し、台地および丘陵斜面に分布する。普通畑および樹園地として利用されており、ミカン、飼料作物、野菜、ばれいしょ、花卉花木等が栽培されている。

2-2-6 黄色土壌

下層土の土色が5YRより黄色味の強い土壌である。表土の土性はCL~LiC、下層土の土性はLiC~HCである。安山岩および玄武岩の風化物を母材とする土壌で丘陵、台地の斜面~緩斜面に分布している。ミカン、飼料作物、ばれいしょ、桑、野菜、花木等が栽培されている。

2-2-7 黄色土壌（湿性）

黄色土壌で鉄、マンガンの斑紋結核を有する土壌である。玄武岩、安山岩の風化物を母材とする土壌で、表土の土性はCL~LiC、下層土はLiC~HCである。台地および丘陵斜面に分布し水田として利用されている。

2-2-8 暗赤色土壌（湿性）

下層土の土色が5YR4/4 又はそれ以下で、鉄、マンガンの斑紋結核を有する土壌である。玄武岩の風化物を母材とする土壌で表土の土性はLiC~HC、下層土はHCである。生月町の台地の緩斜面~斜面に分布し、水田として利用されている。

2-2-9 褐色低地土壌

下層土の土色が黄褐色の低地土壌で鉄、マンガンの斑紋結核を有する土壌である。表土の土性はCL、下層土はLiCで半角の未風化礫を含む。平戸市獅子町に僅かに分布し水田として利用されている。

2-2-10 粗粒褐色低地土壌

下層土の土色が黄褐色の低地土壌で、鉄、マンガンの斑紋結核を有し、下層に礫層が出現する土壌である。

表土の土性はCL~LiC、下層土はLiCで水田として利用されている。

2-2-11 細粒灰色低地土壤

下層土の土色が灰色～灰褐色を呈する土壤で鉄の斑紋を含み、マンガンの結核を有する。表土の土性はCL～LiC, 下層土はLiCである。根獅子および紐差等に僅かに分布し水田として利用されている。

2-2-12 灰色低地土壤

下層土の土色が灰色～灰褐色を呈する土壤で鉄、マンガンの斑紋結核を含む。表土の土性はCL, 下層土の土性はL～SLである。

小河川の河口近くに分布し、水田として利用されている。

2-2-13 細粒グライ土壤

作土直下か地表下30～60以下グライ層を有する土壤である。鉄の斑紋を含み、表土の土性はCL～LiC, 下層土の土性はCL～LiCである。

小河川の流域に点在し、水田として利用されている。

2-2-14 粗粒グライ土壤

作土直下か地表下30～60cm以下グライ層を有する土壤で、台地グライ土壤を含む。作土直下～60cm以下礫層を有し、鉄の斑紋を含む。

表土の土性はL～CL, 下層土はSL～CLで小河川の河口および丘陵台地の斜面に点在し、水田として利用されている。

(長崎県総合農林試験場 小野末太)

IV 傾斜区分図

I) 生月島では、山頭以南の南に傾斜する溶岩台地(Ⅲa)において、山頭(257m)付近では S_3 の傾斜面を示し、山頭池以南では緩傾斜の S_2 面が広いが、金比羅山付近のみは S_4 となっている。辰ノ瀬戸に臨む末端部では、 $S_3 \sim S_4$ となり、台地を浅く刻む神ノ川、緑川下流及び狭小な海岸低地(Ⅳa)は、 S_1 となる。番岳(286m)以北の溶岩台地では、浸食のすすんだ番岳付近及びブユート化した一部番岳(112m)の傾斜は S_4 を示し、北部の拝野台地で S_3 、御崎の台地面及び段丘面では S_2 となっている。

台地の西縁には、弧状の急崖 S_7 がつづき、東縁では S_6 が示され、山麓地(Ⅲa'-1)の S_3 に移行している。北方、拝野・御崎の各台地の西縁は S_7 を示す海食崖となり、その高さは50~100mで、一番高り・二番高り・三番高りとよばれる断崖をなし、その南端部には見事な玄武岩の柱状節理がみられる。

島の東岸の各段丘面(Ⅲa'-2)は、 S_2 の平坦面で、 S_1 を示す海岸低地(Ⅳa)との間には、地すべり滑落崖 S_7 が弧状を呈している。

属島(Ⅱa)の中江ノ島は S_2 を示し、東・南岸には S_7 の海食崖がある。平瀬・鯨島の周辺・大塔は S_1 を示す海食棚で、生月島西岸の海食崖下にある海食棚の S_1 面と共に釣客の集まるところである。

II) 平戸島及びその属島の海岸線も、全島にわたって断続的に S_7 を示す海食崖の断崖がつづき、特に、志々伎火山地(Ⅰh)の南岸には、高さ50~130mの断崖 S_7 が延長約5kmにわたって連続している。島内で S_7 の急崖のみられるところは、北部では、白石背後の山地、垣ノ岳・城岳山頂部の弧状急崖及び安瀧岳山頂平坦面 S_2 の西縁の急崖があげられ、中部の白岳東南部および白岩岳東南部に S_7 の急崖があり、屏風岳火山地(Ⅰf)では、礫岩の山頂部に S_7 の急崖を有し、また、志々伎火山地の山頂部にもみられる。

平戸島北部の垣ノ岳・城岳火山地(Ⅰb)は、 S_5 ・ S_6 の傾斜面から成り、山頂部に S_2 、山腹部に弧状の S_7 を有する。安瀧岳(Ⅰa)ならびに上床溶岩台地(Ⅲc)では、山頂部に S_2 、山腹部に $S_4 \sim S_5$ の急斜面そして山麓地(Ⅰa', Ⅲc')の S_3 面へ移行している。また、安瀧岳北斜面には、山野溶岩台地の S_2 を示す平坦面がある。

北部西岸丘陵地(Ⅱb)では、 $S_3 \sim S_4$ が示され、地すべり地の S_2 面、小河谷の S_1 面を介在している。安瀧川・木ヶ津川流域の紐差低地(Ⅳb)に S_1 面が広く、紐差丘陵地は S_3 面を示し、その両端に噴出した鷲ノ岳・水岳火山地(Ⅰc)では S_4 が示されている。

白岳火山地(Ⅰd)は、山頂部の S_5 から山麓地(Ⅰd')の S_4 に移行し、東麓の地すべり地に $S_2 \sim S_3$ の緩斜面がみられる。断層線谷・猪渡谷川の狭小な S_1 面の西に接する中

部西岸丘陵地(Ⅱc)では、飯良地区で S_3 、堤地区では、北方の地すべり多発地帯の S_2 面と南方の S_4 面に区分され、岬端部には $S_1 \sim S_2$ を示す段丘面が小さく分布している。南北に狭長な S_1 面を示す中津良断層線谷(Ⅳg)の東に接する慈眼岳・白岩岳火山地(Ⅰd)では、山頂部に S_2 の緩傾斜面が断続するが、山腹は $S_4 \sim S_5$ の急斜面からなり、その中を南北に走る細長な S_1 面は敷佐川断層線谷である。東岸の坊主畑溶岩台地(Ⅲd)は、 $S_1 \sim S_2$ の平坦面を示し、東岸丘陵地(Ⅲe)では、 $S_3 \sim S_4$ 面が東北-西南方向に散在する。その延長部に当る前津吉の陸繋島は S_2 を示し、そのトンボ口及び後背低湿地は S_1 面である。

南部の古田川冲積低地の津吉低地(Ⅳh)では S_1 面が示され、その西の屏風岳火山地(Ⅰf)では屏風岳の山頂に S_2 を示すが、その周辺は S_5 、佐志岳山頂は S_5 、礫岩山頂には、 S_7 の急崖が発達。これらの山地の山腹は S_4 を主とし、女鹿峠以西では S_3 が示され、佐志岳東斜面の大野台地では S_2 の平坦面となる。古田川以西の浜岳火山地(Ⅰg)の中起伏火山地では $S_4 \sim S_3$ 面が示され、小起伏火山地では、小突起部に S_3 を示すが、全体的に S_2 の緩斜面から成立している。

船越地狭部の船越砂丘付近の低地では S_1 、周辺の段丘面を示し、志々伎火山地(Ⅰh)に入ると、山峰部に $S_7 \sim S_8$ の尖峰が見られ、山腹は S_5 、山麓地は $S_3 \sim S_4$ となり、南岸の海食崖 S_7 に沿って局地的に S_3 が指摘される。

属島は、前述のように、海食による断崖 S_7 に囲まれ、上阿値賀島・下阿値賀島は海食崖・ S_7 と島内の S_6 の急傾斜地からなる孤島で、頭島・中ノ島・高島・尾上島・魚釣崎島も、海食崖 S_7 と島内の $S_3 \sim S_4$ 面から成り、中ノ島の東岸には S_2 の段丘面を伴っている。

(長崎大学教育学部 石井泰義)

V 水系・谷密度

本図における水系は、Ⅰ)生月島水系とⅡ)平戸島水系に大別される。

Ⅰ) 生月島水系の特色は、東西の分水界が西に偏在し、西岸への水系は短小であり、東岸への水系は地すべりによる土石流の頭部に溜池を有し、各溜池より水田地帯への用水路が水系の主体をなし、東西共に河川を欠いていること及び南北の分水界が島の中央部にあり、山頭より南へ、また番岳より北へ緩斜する溶岩台地上を刻む必従谷がわずかに河川として挙げられるにすぎないことである。

南流する河川として、山頭池・落本場池を水源とする神ノ川及び緑川があり、神ノ川には乏水性に悩む生月島唯一のダム計画がある。北流する河川としては、一号池・二号池を水源とするうんの川が挙げられるにすぎない。

上述のごとく、生月島では、河谷の発達が未分化の状態で、谷密度は極めて小さく、20以下の数値を示している。

Ⅱ) 平戸島水系の特色は、神曾根川・安満川・木ケ津川(中川)・中津良川・古田川が主要河川をなし、これらの河谷がほぼ南北方向の流路をとり、平戸島の火山地を東西に2分していること。さらに安満川・木ケ津川を除けば、東海岸にそそぐ河川は極めて短小であること。換言すれば、東西の分水界は、木ケ津川以北においては、西に偏在し、木ケ津川以南においては東に偏在していることである。なお、2級河川は、上述の平戸島中央部を南北に流れる安満川・木ケ津川・中津良川・古田川・敷佐川の五河川に限られている。

安満川・木ケ津川水系は、ウルム氷期には木ケ津窩で合流する一本の河川であったが、海進によって三川に分かれたものと思われる。西岸丘陵地を刻む河川は短小な溪流をなしている。

中津良川・猪渡谷川・敷佐川・古田川もウルム氷期には一川であったものが、海進によって四川に分かれている。中津良川は白岳・慈眼岳の間を南流し、上流部は草積盆地で、盆地出口には遷移点がある。敷佐川は慈眼岳・白岩岳火山地中を南北に刻み、流路を西に転ずる地点に遷移点ならびに峡谷があり、付近に大元ダムが設けられている。猪渡谷川は、白岳火山地と西岸丘陵地を分けて南北に直線状流路をとっている。古田川は屏風岳・浜岳の両火山地間を北流する河川で、古田川の西方水源をなす屏風岳は、大佐志、早福、大志々伎における河谷の水源をなし、山麓地帯の水田を涵養するという意味で、米ノ山ともよばれる。

上述の中津良川・敷佐川・猪渡谷川・古田川の四川は、いずれも下流部に干拓地が造成され、延長河川となっている。

志々伎火山地や周辺の属島には、短小な溪流のほかは、河川を欠いている。

平戸島における谷密度は、島の東・西両岸の岬端部付近や船越地峡部・大野溶岩台地付近及び属島の諸地域で、20以下の低密度地帯をなし、次いで、20～30の数値を示す地域は、安満川流域・古田川流域・慈眼岳山麓地の赤松地区及び坊主畑溶岩台地がこれに該当し、島の火山地・丘陵地の大部分は30以上の谷密度地帯をなしている。このうち、40以上の高密度地域としては、平戸島北部の垣ノ岳・城山火山地及び安満岳火山の山麓地や上床溶岩台地南麓の木場地すべり地が挙げられ、北部西岸丘陵地では40～50が示され、白岳・有僧都岳・小白岳付近で40～45、中津良川上流の草積盆地周辺で50台が示される。慈眼岳・白岩岳火山地では、この火山地の中央を南北に刻む敷佐川上流部で40～55の高密度地帯をなし、敷佐川および中津良川・大川原川支谷の三つの河谷によって刻まれる分水界付近では、61の最高値が示されている。中部西岸丘陵の堤周辺の地すべり地では、局地的に40以上となっており、屏風岳火山地では、屏風岳西方鞍部（女鹿峠）付近、屏風岳・佐志岳・礫岩の各火山の境界をなす鞍部付近で侵食度が大きく、谷密度40内外の高さを示し、佐志岳東斜面の大野溶岩台地付近は、15～20の低密度地帯をなす。南端の志々伎火山地では、35内外を示し、平戸島における谷密度としては中位のものとなっている。

（長崎大学教育学部 石井泰義）

VI 防 災 図

(1) 砂防指定地

河 川 名		所 在 地	指 定 関 係		着工年度	竣工年月
幹川名	溪流名		告示年月日	面積(ha)		
安満川	安満川	平戸市深川町山ノ田	S.50. 5. 27	6. 08	5 1	5 4
神の川	神の川	北松浦郡生月町南免	S.49. 5. 23	9. 00	4 9	5 4

(2) 急傾斜地崩壊危険区域

指定区域名	所 在 地	告示年月日	面積 (ha)	人家 (戸)
な し				

地すべり防止区域

指定区域名	所在地	告示年月日	面積 (ha)	着工年度	竣工年度
森 岳 崎	北松浦郡生月町	38. 8. 30	139. 00	34	40
里 堺 目	〃	38. 8. 30	202. 00	44 34	実施中 実施中
松 本	〃	38. 2. 27	166. 00	28	実施中
佳 路 (追加)	〃	38. 8. 30 43. 3. 18	13. 70 99. 32	37 40	43 53
有 景 田	〃	38. 8. 30	20. 00	34	38
赤 子	〃	38. 8. 10	13. 00	35	37
主 師	平戸市主師町	38. 8. 30	20. 00	41	46
田 崎	〃 田崎町	37. 3. 24	29. 50	34	38
飯 良	〃 飯良町	36. 5. 17	25. 32	36	実施中
獅 子	〃 獅子町	38. 8. 29	12. 75	未着工	
北 飯 良	〃 飯良町	47. 3. 18	84. 62	47	実施中
南 飯 良	〃 〃	38. 8. 30	12. 0	40	43
馬 込	〃 堤町	37. 2. 14	17. 0	34	39
小 島	〃 〃	37. 2. 14	15. 0	35	38
前 津 吉	〃 津吉町	45. 11. 26	68. 80	45	50
津 吉	〃 〃	39. 1. 18	5. 88	39	40
立 石	〃 小田町	37. 2. 14	25. 56	33	37
大 志 々 伎	〃 志々伎町	38. 8. 30	12. 00	39	44
大 川 原	〃 大川原町	37. 2. 14	13. 50	35	38
迎 紐 差	〃 紐差町	36. 5. 17	7. 90	35	35

VII 土地利用現況図

VII-1 生月島の土地利用

生月島の耕地率は2.9%で、県平均18%をかなり上回り、耕地のうち水田率は63.6%を占め、山頭溶岩台地面を除けば、水田は地すべりに起因する土石流で構成された段丘面及び海岸低地に集中し、畑は台地面及び山麓地に分布して、耕地の田畑別地域分化がみられる。山頭溶岩台地面は田畑の混在地帯となっている。

水田は東海岸の境目・松本地区及び大久保地区に集团的に分布し、北部の御崎・拝野では短小な谷地に、西岸では急崖下の地すべり鞍部の低地に点々と散在している。なお、これらの水田地帯の頭部には、滑落崖に沿って湧水による溜池が構築されている。また、この地帯には、二次的地すべりが顕発し、明治以後現在に至るまで4～5回の災害を蒙っている。溶岩台地上では、山頭以南の台地面を浅く刻む河谷に短小な水田がみられるにすぎない。各水田では例外なく早期栽培が行われている。

畑は山頭溶岩台地面上及び地すべり滑落崖下の山麓地に分布し、水田地帯の外縁をなしている。例外的に、御崎・拝野では段丘面上が畑に利用されている。

また、生月島は牧牛の島で、農家1戸当たり2.0頭の肥育牛を飼育し、御崎・拝野・山頭の溶岩台地面では、放牧地に利用され、山頭には生月町和牛生産組合の放牧地がある。

森林は、溶岩台地面上の自然林が主で、人工林率は23%にすぎず、針葉樹56%・広葉樹44%となっている。

VII-2 平戸島の土地利用

平戸島の耕地率は県平均18%とほぼ同じ17.6%を示し、森林・原野が大部分を占める。耕地のうち、水田が優位で64.9%を占め、ここに示された地図の範囲内では、安満川・木ヶ津川・中川流域の紐差低地及び古田川流域の津吉低地にやや集団的水田地帯が広がるほかは河谷に沿った細長い樹枝状水田地帯で、安満・木ヶ津・中津良・敷佐・猪渡谷・古田の諸河川の河口には旧藩時代に開かれた干拓地を伴っている。米作は早期栽培を主とし、僻地度の高い西岸の水田には大根の裏作が行われ、水田のまわりに見られる大根干し棚の景観は特異である。

畑は、水田に接する段丘又は山麓地・丘陵の末端に散在しているのが一般的であるが、坊主畑溶岩台地や獅子・根獅子・早福・船越・高島などの諸地区では、集落の周辺の段丘や丘陵末端に畑が卓越している。畑作物としては、馬鈴薯・甘藷について大根・玉葱などがあげられるが、特産地形成をなす特定作物をあげることは難しい。

果樹園としては、安満岳火山地の鯛ノ鼻南麓から紐差丘陵地にかけての一带や鷲ノ岳南

麓に昭和30年以後パイロット・ファームとして開墾されたミカン園があげられるにすぎない。

島の広範を占める森林地では、針葉樹 33%、広葉樹 55%、その他 12%となっており、本島の海岸部及び属島では人工林率（長崎県農林部林務課・林班別資料による）は、20%以下で自然林が大半を占め、特に上・下阿値賀島では、ハマビワ-オニャブソテツ群集の中にビロ-樹の自生がみられる。本島の丘陵地では、人工林率 30%内外で、シイ萌芽林を主とする広葉樹が自然林をなし、安満岳・白岳・慈眼岳・屏風岳などの火山地とその山麓地では人工林率 40%以上と高くなっている。人工林率 60%以上を示す針葉樹林地帯は、安満岳火山地の鯛ノ鼻及びその山麓地で、安満岳では 20%内外、その山頂部にはアカガシ-ヤマシキミ群集・アカガシ萌芽林などの自然林が残存している。上床の山頂平坦面では人工林率 30%内外で低いが、その山麓地では 80%内外の高率を示す針葉樹林地帯である。白岳火山地の有僧都岳-白岳及びその山麓地ならびに、慈眼岳・白岩岳火山地及びその山麓地は 50~80%の高率をなす林班群から成り、広葉樹の自然林から針葉樹の人工林への転換が計られている。屏風岳火山地では 40~60%を示すが、礫岩付近では人工林率 14%と低く、自然林が多い。浜岳火山地では、浜岳周辺の中起伏山地で 30%内外、小起伏山地で 40%内外の人工林率を示し、志々岐山の中腹以上では 25%内外の人工林率で、広葉樹を主とする自然林が多く残存している。

平戸市の牛の飼育頭数 5625 頭、農家 1 戸当り 1.6 頭で、採草放牧地・放餌場は、西岸丘陵地の春日・獅子・根獅子・飯良一堤及び浜岳・志々岐山の一部に局地的に分布し、上床には肉用牛繁殖飼育センターの放牧地がある。

（長崎大学教育学部 石井泰義）

参考資料：長崎県の植生・長崎県 1977年3月

1978年12月 印刷発行

県北総合開発地域
土地分類基本調査

生月・志々伎

編集発行 長崎県土地対策室

長崎市江戸町2-13

印刷 富士マイクロサービスセンター

熊本市水前寺6丁目46-1